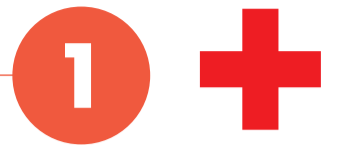


赤十字NEWS

January 2016 Vol.908
http://www.jrc.or.jp



日本赤十字社
人間を救うのは、人間だ。Our world. Your move.

赤十字新聞 編集・発行/日本赤十字社 企画広報室 〒105-8521 東京都港区芝大門1-1-3 TEL:03-3438-1311 一部20円 赤十字新聞の購読料は、社費に含まれています。



来日したシリア赤新月社のボランティア ラワンさん(左) とラガドさん(右) と日本赤十字社近衛社長

CONTENTS

TOPICS

「はたちの献血」キャンペーン
羽生選手からのメッセージ
東京都赤十字血液センター
移転オープン
第10回赤十字・いのちと献血
俳句コンテスト表彰式

TOPICS

赤十字・赤新月国際会議
「一つの赤十字運動」を決議
「未来のトモダチへ」
リースを作り子供の家へ
健康豆知識
メタボリックシンドローム
常任理事会開催報告
御下賜

SPECIAL

特殊奉仕団
赤十字飛行隊
空の救援隊は
ベテランパイロット集団

AREA NEWS

愛知・静岡・沖縄・兵庫
徳島・熊本・新潟
大分・広島
ハートラちゃんのお菓子
ネット販売
Voice&プレゼント

WORLD

国際人道法模擬裁判
国内予選 同志社大
チームが3度目の栄冠
フィリピン台風災害
復興支援
コラム 被爆70年
守るべきいのちと尊厳



「支援を必要とするすべての人に 関心を持ち続ける努力を」

日本赤十字社社長 近衛 忠輝

皆さま、明けましておめでとうございます。

今年は東日本大震災が発生して5年の節目を迎えます。私たちはこの間、国内から寄せられている3361億円の義援金を地方自治体を通じて被災者の皆さま(約45万件)にお届けすると同時に、世界から寄せられた約1000億円の救援金によって復興支援事業に取り組み、日赤自身の災害対応能力の強化にも取り組んでまいりました。また、災害に立ち向かい、立ち直る力を地域に育てていく視点で、関係機関と協力した訓練や防災教育などにも力を入れてきました。

しかし被災地には、高齢化が進む中での復興をどう展望するのかなど、多くの課題を抱えてきた地域もあります。実は阪神・淡路大震災でも、復興には10年以上の時間がかかりました。何年たったから…と節目に限ることなく、関心を持ち、支え続けなければなりません。

こうした課題は国内災害だけに限りません。昨年ネパールを襲った大地震は8800人を超える方が亡くなるなど大きな被害を出しました。日赤は緊急救援に続き、皆さまから寄せられた救援金を基にした復興支援事業を展開しています。一方で、国際赤十字が支援を行う自然災害の9割

はマスコミの注目度が低く、支援のための十分な寄付が集まらない現実があります。気候変動の影響で災害の増加が予想される中、私たちの取り組みへの関心を広げ、支援と備えの強化を実現していくことが急務になっています。

昨年から世界的なニュースになっている難民問題も同様です。欧州に殺到した中東やアフリカからの難民がクローズアップされましたが、世界的な課題であり、各国の赤十字は難民が人道的な待遇を受けられるよう支援を続けています。シリアの紛争も解決には長い時間がかかるはずで、災害と同様に人道的な関心を持ち続け、苦しんでいる人たちに支援を届けていかなければなりません。それこそが赤十字の本質であり使命です。

私たちがこうした役割を発揮できるよう今年も日赤への期待と温かなご支援をどうぞよろしくお願い申し上げます。

「キミに救えるいのち」

男子フィギュアスケート 羽生選手が呼び掛ける

平成28年「はたちの献血」キャンペーン(1月1日〜2月29日)

今年「はたち」を迎える若者を中心に献血への理解と協力を広げる「はたちの献血」キャンペーン(主催:日本赤十字社、厚生労働省、都道府県。前年に引き続きキャンペンキャラクターに就任したフィギュアスケート

男子シングルの羽生結弦選手が力強いまなざしで「キミに救えるいのち」と献血協力者を呼び掛けます。

「はたちの献血」キャンペーンは、昭和50(1975)年にスタート。冬季の献血者確保と医療機関への血液

製剤の安定供給を目的に実施しています。今年も羽生選手が出演するCMやポスター、キャンペーンサイト(PC/スマホ) http://ken-love.jp/hatachi/を中心に全国で広報活動を展開します。



羽生選手から新成人へのメッセージ

新成人を迎える皆さん、おめでとうございます。私は一昨年成人になりましたが、成人は大人としての新たな一歩となります。皆さんも、自分自身の強い意思をもって、思い描いた大人に近づけるよう一歩一歩進んでください。私自身も挑戦し続けたいと思います。

そして、献血についても「救えるいのちがある」という事を知っていただき、一歩を踏み出してもらえたらと思います。



初めての献血者限定 オリジナルグッズプレゼント

「はたちの献血」キャンペーン期間中に全国の献血会場で初めて献血される方限定で先着5万人にオリジナルクリアファイルをプレゼントします!

※当日のご体調や、医療機関の血液需要に応じて、献血をお断りする場合がございますので、予めご理解いただけますようお願い申し上げます。



東京都赤十字血液センター 災害時の供給体制を強化

都内の医療機関へ血液製剤を供給する拠点である東京都赤十字血液センターがこのほど新宿区内に新築・移転。12月14日から業務をスタートさせました。

同センターの血液製剤供給量は年間約62万本と全国最多。これまで関東甲信越ブロック血液センター(東京・江東区)内に併設されていたが、災害時の供給体制強化へ向けて新センターが計画され、1年半をかけて建設が進められていました。新センターは地下1階、地上4階で、延床面積8287平方メートル。建物内の倉庫に救済物資などを備蓄しているほか、敷地内の公園には防災トイレ兼用ベンチや、炊き出し用かまどベンチを設置しています。また、地域に開かれた施設を目指し、2階に献血などについて学べる情報発信スペース、4階にはボランティア活動などに使用できる共有スペースを設けています。同月8日の竣工式で挨拶した日本赤十字社の大塚義治副社長は「これからの血液センターは地域に貢献する新たな付加価値を見いだすことが課題」と指摘。その上で、新センターに「災害時に救護所として活用可能なスペースを持つことなどを紹介し、「全国のセンターを牽引する存在として、先駆的な事業の開発に取り組んでほしい」と期待を表明しました。



地域の歴史を考慮し、外観は武家屋敷をイメージ



公園には、座面を取るとトイレとして使用できるベンチ。下は下水に直結

いのちの輝きを見つめ続けて10年

第10回 赤十字・いのちと献血 俳句コンテスト表彰式

俳句を通じて、いのちの尊さや助け合い、献血の大切さを広げていこうと平成18年に始まった「赤十字・いのちと献血俳句コンテスト」。

10回目となった昨年は全国から20万句を超える作品が寄せられ、12月5日に日本赤十字社本社(東京・港区)で行われた表彰式で最優秀賞や優秀賞など15作品に各賞が贈られました。

厚生労働大臣賞には山田恭也さん(岡山県、中学2年生)の作品「初夢はけんけつをする 僕だった」が選ばれました。審査員長の俳人 榎里さん(沖縄県、小学校2年生)は「妹が欲しいと思つて、このほりを増やしてもらいいました」と句に込めた

「このほり今年は一びきふえました。作者の美崎伊」



受賞作品 (上位15作品・敬称略)

- 厚生労働大臣賞(岡山県 山田恭也) 初夢は けんけつをする 僕だった
- 文部科学大臣賞(石川県 二枝紗莉惟) 靴紐を 結び直して 入学す
- 日本赤十字社 社長賞(沖縄県 美崎伊榎里) こいのぼり 今年は一びき ふえました
- ゲスト審査員賞(宮崎県 近藤國法) 母の編む セーターいつも 大きめに
- ピカチュウ賞(岩手県 千葉はるか) 夏休み あけてえみちゃん 真っ黒け
- 最優秀賞 小学校低学年の部(神奈川県 遠藤芽依) 雪だるま かえる時まで まっててね
- 最優秀賞 小学校高学年の部(愛知県 中谷光) 待つていた ツバメがやとと 来てくれた
- 最優秀賞 中学生の部(大阪府 桑野毅彦) 戦争を くわしく知った 夏休み
- 最優秀賞 高校生の部(福岡県 堺利菜) 帰省した 兄の背中が 遠い人
- 最優秀賞 一般の部(福岡県 柳本昭子) 産声を 皆で待ってる 夏座敷
- 優秀賞 小学校低学年の部(静岡県 岡村幸汰) むかえ火を ずつと見ている おじいちゃん
- 優秀賞 小学校高学年の部(鳥取県 徳田紗也) けんけつ車 近くでしている 運動会
- 優秀賞 中学生の部(石川県 永井さくし) ばあちゃんの すがたが小さく 見えた夏
- 優秀賞 高校生の部(静岡県 櫻井日菜子) 菜の花の 波間にゆれる ランドセル
- 優秀賞 一般の部(神奈川県 田淵信也) 初電車 献血カードを 懐に

受賞作品はこちらからもご覧いただけます。
http://www.ken-haiku2015.jp



世界の赤十字社・赤新月社による国際会議開催

「二つの赤十字運動」を決議

災害対応能力強化へ「10億人キャンペーン」も確認

国際赤十字・赤新月社連盟(連盟)の第20回総会が12月4〜6日、スイス・ジュネーブで開催され、翌7日には国際赤十字・赤新月運動代表者会議が開かれました。総会冒頭、連盟の近衛忠輝会長(日本赤十字社社長)は気候変動や紛争拡大などの人道危機に触れ、各赤十字社・赤新月社(以下、赤十字等)の強化や国際的な連携の必要性を強調。また「赤十字の最大の資産はボランティア」と述べ、「人びとの参加促進に向けた環境整備を図るとともに、ボランティアの権利と責任を明確にする『憲章』の制定を」と問題提起しました。

一方、2年前の代表者会議では「核兵器廃絶に向けた4カ年行動計画」が採択され、進められています。日本赤十字社はボランティアを巻き込んだ「折り鶴」活動や核兵器問題を考える大学での出張講座などの取り組みを報告しました。

同会議では、災害に強い地域づくりを進める「10億人キャンペーン」が焦点の一つになりました。近衛会長は「世界の防災意識の底上げで、レジリエンス(※)が高まれば、多くのいのちが救われることになる」とキャンペーンの意義を強調。各国参加者からは「防災教育の重要性」「政府との連携強化」などの発言が相次

共通の広報戦略を推進

総会と代表者会議は2年に一度、各国・地域の赤十字

災害対応能力の強化を

紛争や災害時の人道支援活動を安全に行うには、国



総会では大洋州のツバルを190番目の連盟加盟国に承認



会場に設けられた日赤ブースでは、青少年赤十字加盟校などで活用が広がる「まもるいのち ひろめるぼうさい」の英訳版を紹介

ぎました。

日本政府の代表は、昨年3月の国連防災世界会議(仙台市)で注目された古くからの伝承に言及。「古くからの伝承による早期警戒が津波被害からいのちを救った逸話も残されている。古くからの伝承を見直すことは、地域の災害対応能力強化に貢献するはず」と指摘しました。

ユース参加を促進

今回の全会議を通じた特徴は、2年前に引き続き「若者(ユース)参加」を意識した運営が進められたこと。そこには近衛会長も指摘した「ボランティア活動の活性化」に向けて、ユースの参加促進が不可欠との問題意識があります。

日赤代表として参加した神奈川県青年赤十字奉仕団の田中友美乃さん(津田塾大学4年)は、国際会議本会議で赤十字の基本7原則について「その普及と実践の『敵』の一つが無関心です。無関心との闘いには、人道教育の促進が不可欠」と発言。また、他の赤十字ユースとの意見交換では、赤十字運動のさまざまな実践をソーシャルメディアなどを通じて市民に発信する努力を強める必要性を訴えました。

※レジリエンス(Resilience)とは、災害などの予期せぬ惨事を予測し、未然に防ぎ、適切に対応し、そして逆境から回復してゆく一連のプロセスです。

海外たすけあいキャンペーン

手作りリースに愛を込めて 子どもたちと世界に笑顔

クリスマスリース作りを通じて、世界で起きている人道問題を考えるとともに、完成したリースを子どもたちに贈り、笑顔を広げていこうというイベントが12月12日と15日、日本赤十字社本社(東京・港区)などで開催されました。

「未来のトモダチへ」と銘打ったこのイベントは、「海外たすけあい」キャンペーンの一環で、日赤と赤十字国際委員会(ICRC)の共催。大学生や社会人など31人の参加者は、災害・紛争などによる人道被害と、児童虐待など日本の子どもたちが置かれている状況について学んだ後、リース作りに挑戦しました。



もみの木や木の実を使ったリース。皆で心をこめて作りました

「もの作りを通して、貢献できるのが良い。手作りの温もりが伝わってほしい」「初対面の人とリースを一緒に作り、子どもたちに届けるなんて普段できません。幸せな気持ちになりました」など参加者からは笑顔がこぼれました。

完成したリースは日赤が運営する児童養護施設「赤十字子供の家」(東京・武蔵野市)に届けられました。プレゼント係はサンタクロースに扮した日赤職員。リース



子どもたちは、サンタさんと一緒にリースを飾りました

常任理事会開催報告

平成27年12月18日、本社において平成27年度第8回の常任理事会が開催されました。今回の常任理事会は付議事項はありませんでしたが、

天皇皇后両陛下から御下賜金

12月11日、天皇皇后両陛下から、日本赤十字社の事業奨励のために金一封を賜りました。

知って良かった! 日赤のドクター&ナースが教える健康豆知識

②0メタボ 食事と運動の工夫で生活習慣病を防ぐ 福岡赤十字病院 人間ドック健診センター 健診部長 田中道子さん

「メタボリックシンドローム(メタボ)」とは単にお腹が出ている体型、という意味ではありません。メタボには診断基準があり、第一におへその高さのお腹回りが男性では85センチ、女性では90センチ以上であること。これに加え、血圧、空腹時の血糖値・血清脂質のうち二つ以上が基準値を超えている状態をメタボと呼んでいます。中高年に限らず、30代からメタボと診断される人もいます。メタボになりやすい要因の多くは遺伝素因と環境要因です。自分の体質を知るため、家族に血糖値や血圧が高い人はいないかチェックしてみましょう。メタボはさまざまな生活習慣病を誘発します。血

液中のコレステロールなどの脂質が増え血管が狭くなる脂質異常症や、血糖値の高さが引き起こす糖尿病などです。これらの症状は心臓病や脳血管疾患につながる動脈硬化の原因にもなります。メタボはいのちに関わる危険な症状につながりますが、メタボと診断された時点で生活習慣に気を配るようになれば、病気を予防することは可能です。メタボの改善・予防には全身を動かし内臓脂肪を減らす有酸素運動が効果的です。なかでも、お金をかけずに手軽にできるウォーキングがお勧めです。ポイントは、いつもよりも少し早く、二人で一緒に歩きながら会話ができるくらいのスピードで歩

くこと。膝の痛みなどで歩くのは難しいという方は、椅子に座ったままラジオ体操をするのもいいでしょう。上半身はいつもどおりに、膝を動かすのではなく足を持ち上げるようにして、座って足踏みしながら体操をしてみましょう。食生活ではバランス良く栄養を取ることが大事です。炭水化物が含まれる米や麺類などは糖質が必要になる朝と昼に取り、夜はなるべく控えます。夜遅くの食事は肥満につながるため、寝るまでの3時間は食事をしないよう心掛けましょう。食べ過ぎを防ぐコツはまず野菜から食べること。ゆっくり味を楽しみながら食べることで満腹感を得られます。



◆ドレッシングには塩分や油分が多く含まれる場合も。かける量に気を付けておいしく野菜を食べましょう

福岡赤十字病院 〒815-8555 福岡県福岡市南区大楠3丁目1-1 TEL:092-534-8430(直通)

空の救援隊はベテランパイロット集団 その名は「赤十字飛行隊」!

富士山を望む富士川滑空場(静岡県静岡市)にヘリコプターや小型飛行機などが次々に降り立ってきます。各機体には赤十字マークが付けられ、パイロットのジャケットや帽子にも赤十字マークが誇らしげに。赤十字飛行隊のメンバーたちです。

この日は静岡県や関東地方の9支隊から17機が参加。着陸不能な災害現場への情報伝達として通信筒を投下する訓練や、医薬品などの物資輸送、着陸訓練などが行われました。



本社直轄奉仕団として誕生

赤十字飛行隊の結成は昭和38年。社団法人日本飛行連盟に所属するパイロットの中に「社会に役立つ活動」との機運が高まり、同連盟を母体に日本赤十字社本社直轄の奉仕団として誕生しました。

スタート時のメンバーは、旧海軍のパイロット経験者を中心に十数人。同連盟の加藤晴恵事務局長は「当時はまだ警察や消防にヘリコプターが配備されていませんでしたから、空からの救援活動を展開できるのは唯一、赤十字飛行隊だけ。大きな期待が寄せられていました」と語ります。

結成翌年の昭和39年に発生した新潟地震では、地盤沈下で大規模の離着陸が不能になった新潟空港に医師や医薬品などを10日間にわたりピストン搬送。液化化した滑走路での離着陸は、赤十字飛行隊のベテランパイロットならではの技でした。

安全第一をモットーに52年間無事故

全国に37支隊・2分隊を持つまでに成長した赤十字飛行隊は現在、飛行機やヘリコプターの操縦免許を所有する約150人のメンバーが、防災訓練への参加や海や山の安全パトロール、災害救護などを展開しています。

活動中に最も気を配るのは「安全」です。隊員の皆さんは「赤十字マークを付けて墜落するわけにはいきません。安全第一にモットー」と心掛けています。赤十字飛行隊隊長の高橋淳さんは「飛行中にパニックに陥らないよう、常に余裕を持って飛ぶことが大切」と安全運航

への心構えを日頃から隊員に訓示しています。こうした積み重ねにより赤十字飛行隊の訓練・活動中の事故は結成以来ゼロを更新し続けています。

ニッチな被災者ニーズにも対応

現在は、各都道府県の警察・消防にヘリコプターが配備され、災害時の救護活動などの役割を担っていることもあり、赤十字飛行隊に求められる役割も変わってきています。

「私たちはボランティア。プロである警察や消防の空の活動を邪魔しないように注意しています。被災者ニーズがあっても公的機関が手を出せない活動もありますから、そうした“すき間”の任務を見つけることも大切です」。

その一例が平成3年の雲仙普賢岳噴火に際して行った調査飛行です。大規模な火砕流により、被災地住民が長期間にわたり自宅に戻れなくなる中、飛行隊は地域からの要請を受けて被災者自宅周辺の調査飛行を繰り返し実



雲仙普賢岳噴火時の調査飛行

施。大きな感謝が寄せられました。

しかし、災害救護のための飛行活動は年に何度もありません。平時の活動領域を広げていくことも課題です。これまでも支隊ごとに、海岸や雪山での事故防止に向けた空中からのパトロールや血液輸送、離島などからの患者搬送などに取り組んできました。加藤さんは「平時から赤十字の活動に協力できることがもたらすはず。ぜひ飛行隊の本部、支隊に声をかけてほしい」と期待を寄せています。



日本全国の赤十字飛行隊



1 飛行隊のボランティア活動は燃料費もすべて自費
2 昨年の台風18号。茨城・栃木の大雨調査を実施。映像を提供
3 谷あいでの遭難事故を想定した医薬品などの投下訓練も行う
4 群馬支隊は日本動物園水族館協会などと協定を結び、訓練も実施
5 ヘリコプターは離発着の場所選定の点など、活動がやすく、機体は増えつつある

空からの人道支援

海外救援から血液輸送まで幅広く

空中パトロール

海難事故防止へ向けた海岸上空のパトロールは、日本飛行連盟が昭和37年からスタート。このボランティア活動が赤十字飛行隊結成のきっかけになりました。空中パトロールはその後飛行隊として続けられ、昭和40年には、200人近い海水浴客らを救助。現在も支隊ごとに、海岸や山岳パトロールに取り組んでいます。



海岸パトロール

血液や臓器を空中搬送

伊豆諸島で行った献血の血液を飛行機で搬送する取り組みは40年以上にわたり実施。災害で交通機関がまひした際に血液製剤を緊急搬送するために出動したことも数多くあります。近年は、警察や消防、病院、臓器移植ネットワークとの連携の下、臓器移植のための臓器搬送の取り組みも強化しています。



血液を搬送

人道支援へ海外フライト

北海道の支隊では平成4年から、ロシア(当時はソビエト連邦)サハリン州との間で災害救護や医療活動などの相互協力を目的とした海外フライトを開始。注射器や血圧計などの医療機器を空輸し、現地に贈呈しました。平成7(1995)年のサハリン地震の際には、日赤の医師・看護師が被災地に派遣されましたが、そのフライトにも飛行隊が協力しています。

災害時の調査・輸送

阪神・淡路大震災(平成7年)、新潟中越地震(平成16年)、そして東日本大震災(平成23年)など大きな災害では、被災状況の調査や救援物資搬送などの支援活動を展開しています。昨年9月に茨城県などに大きな浸水被害をもたらした大雨災害でも、群馬支隊のヘリコプターが出動しました。

災害に備えて行政や他機関との間で協定を結ぶ支隊も増えています。和歌山支隊は和歌山放送との間で被災状況を上空から伝える協定を平成20年に締結。群馬支隊では東日本大震災後、公益社団法人日本動物園水族館協会や群馬県危機管理室などと協定を締結し、災害時の訓練も重ねています。



昭和39年新潟地震、液化化した空港に着陸

「皆さんに喜んでもらえるのが 私たちの喜びです」

世界最高齢事業用パイロット
赤十字飛行隊隊長 **高橋 淳**さん



第4代の赤十字飛行隊隊長を平成14年から務める高橋淳さんは現在93歳。世界最高齢のパイロットとしてギネス認定されていますが、「自分をベテランと思ったことはないですよ。もっと上手く操縦できたんじゃないかなって、フライトごとに反省してます」。

高橋さんと飛行機の出会いは小学校5年生。兄のついでに乗せてもらった新聞社の飛行機から東京上空を眺めた瞬間、「飛行機乗りになろう!」と誓ったといいます。しかし、当時は軍事一色の時代です。旧海軍の飛行予科練習生として訓練を積んだ高橋さんは、太平洋戦争中、魚雷を積んだ大型攻撃機のパイロットとして米艦船との戦闘に参加。終戦間際には特攻を命じられた経験もあります。

「戦死は名誉だって叩き込まれたけど、どんなことがあっても生きて帰ってこよう。パイロットの僕が諦めたら、一緒に乗っている仲間まで死んでしまいますね。正直、戦争が終わった時は「これで死なずにすむ」とほっとしました」

戦後は「自由に空を飛びたい」と航空自衛隊などを断り、フリーのパイロットとして航空測量や航空写真の撮影、訓練生の教官などを務めてきました。赤十字飛行隊には創設時から参加。新潟地震、雲仙普賢岳の噴火災害、そして東日本大震災、大きな災害時の活動の常に最前線に立ってきました。「みなさんに「ありがとう」って喜んでもらえるのがうれしくてね。それが私たちの喜びです」



戦時中の高橋さん



後部座席で抱かれている子が高橋さん(小学5年生)

女性隊員も活躍中!

アジアを代表するスーパーパイロット
かなお **鐘尾 みや子**さん



「男の世界」のイメージが強い飛行機パイロットですが、赤十字飛行隊には女性メンバーも活躍しています。その一人が鐘尾みや子さん(66)。エアロパティック(曲技)飛行の競技会に出場し、アジアで唯一同競技の国際審判資格も持つスーパーパイロットです。

子どもの頃からの憧れだった飛行機の操縦免許を30代で取得。赤十字飛行隊には隊長の高橋淳さんから30年ほど前に誘われました。「事業用ライセンスも持っていたので、人の役に立つことに生かしたいと思っていました」

これまでに九十九里浜(千葉県)の海岸パトロールなどに参加してきました。先輩隊員の中には、活動中に救命具を投下し人命救助をした人もいました。「自分たちのできる範囲でボランティア参加することはとても大切なことですよね」と語る鐘尾さんの人道支援フライトはこれからも続きます。



グライダー-曲技飛行世界選手権(ポーランド)。審判が採点結果について議論をかわす。(左)鐘尾さん

名古屋オーシャンズ選手が病院の子どもたちを激励!



愛知県

プロフットサルチーム・名古屋オーシャンズの選手3人が11月24日、名古屋第一赤十字病院の小児医療センターを訪問。入院している子どもたちを激励しました。



3選手には子どもたちから色画用紙で作られたメダルがプレゼントされました

今回の訪問は、愛知県支部と同チームが結ぶパートナーシップ協定の一環として行われたものです。3人の選手は、病室から出ることのできない子どもたちを激励した後、センター内の食堂で病室から出られる子どもたちと交流。華麗なリフティングを披露すると、大きな拍手と歓声があがりました。選手たちは「自分自身もけがをして、リハビリや厳しい練習をしている。これから必ずいいことが待っているから、みんなもがんばって」と子どもたちにメッセージを送りました。

ロコモ予防し健康寿命を延ばそう! 赤十字病院でイベント



沖縄県

加齢による運動器障害で寝たきりの危険性が高い状態を示す「ロコモティブシンドローム(ロコモ)」。ロコモを予防し、健康寿命を延ばそうという地域住民向けのイベントが11月16日、沖縄赤十字病院で開かれ、41人が参加しました。



参加者は、歩幅や足の筋力、バランス能力などを測る「2ステップテスト」に挑戦

講演で同院整形外科の大湾一郎部長は「健康長寿を阻害するロコモやメタボ、認知症の予防には歩くことが大切。通常よりも少し早いスピードで歩くことを心掛けましょう」とアドバイス。筋力測定・ロコモチェックも行われ、参加者からは「測定や運動法を教えてください」との声が多く聞かれました。

JRC高校生メンバーが戦争体験を通じて平和学習



徳島県

青少年赤十字(JRC)高校生協議会の秋季学習会が11月15日、徳島県支部で開催され、赤十字救護看護婦として戦地に赴いた鈴江敏子さんが講演。極限状態での救護体験を語りました。



「戦争のない平和な世界を守るため一生懸命頑張ってる」と訴えた鈴江さん

学習会は、JRCの高校生メンバーが企画・運営し、年2回開催。今回は、高校生と指導者ら20人が参加しました。第二次世界大戦末期に中国北部へ派遣された鈴江さんは2年間にわたり救護活動に従事。次々と息絶える兵士を看取り、遺体を火葬した経験などを語りました。参加者からは「平和な世の中が続くよう少しでも自分たちができることを考え、今後の活動に取り組みたい」と力強い声が上がりました。

「海外に届け! 私たちの想い」 JRC小学生メンバーが街頭募金



新潟県

新発田市立中浦小学校の6年生児童が10、11月に学校の文化祭と新発田市内で中東人道危機への街頭募金活動を行いました。



知らない人に「募金をお願いします」と訴えた勇気が、世界を変える力に!

同校では、青少年赤十字の国際理解の授業を受けた児童が、総合的な学習の時間を中心に紛争や飢餓、貧困、難民などの国際問題について学びました。募金活動は、児童自ら「困っている人を救いたい!」と発案し、企画・準備しました。緊張した様子で始まった街頭募金でしたが、それまでの学びの積み重ねにより大声で通行人に呼びかけることができました。児童からは「多くの人から募金をもらえてうれしかった」「中東の人に役立つよう頑張りたい」などの声聞かれました。

園児から高齢者へ 笑顔と元気パワーのプレゼント



静岡県

引佐赤十字病院内に設置されている通所介護「なのはな」で10月23日、デイサービスを利用する高齢者と近隣の園児との交流会が開かれました。



子どもたちの交流で利用者一人ひとりに笑顔とパワーが溢れてきます

「なのはな」は健康チェックやレクリエーション、食事・入浴サービスの施設。年に数回、近隣の幼稚園児を招待し、交流会を開いています。この日の交流会には利用者14人、年長園児28人が参加し、じゃんけんゲームや肩たたきなどで楽しいふれあいの時間を過ごしました。利用者からは「かわいくて見てくれるだけで元気がでるね」「うれしくて涙がでるよ」「まだまだ長生きしないとね!」と、生き生きした言葉があふれました。

憧れのナースキャップ 姫路赤十字看護専門学校で戴帽式



兵庫県

姫路赤十字看護専門学校で10月30日、戴帽式が行われ、1年生46人が真新しいナースキャップを戴きました。



厳かな雰囲気の中、看護師を目指す学生たちの気持ちは一層確かなものに

看護師の象徴であり、看護師を目指す者にとって憧れでもあるナースキャップ。戴帽式には「人のいのちを預かる仕事をしていくにあたり、重い責任感を自覚させる」という深い意味があります。

姫路赤十字病院の看護部による手作りコサージュを胸にした学生たちは、キャンドルの明かりの中、初めて被るキャップの重みをかみしめながら、看護の道にさらなる1歩を踏み出しました。戴帽式後には2、3年生からお祝いの言葉や歌などが送られました。

災害時の「整体」などを学ぶ看護師研修会



熊本県

災害時のご遺体への対応や原子力災害時の救護活動などについて学ぶ「災害時フォローアップ研修会」が12月5日、熊本赤十字病院で開催されました。災害特性に応じた救護活動へ向けて、同院で今年度から取り入れた研修で、看護師を対象に看護師長らが指導を行いました。



整備した腕について指導を受ける看護師ら

520人が亡くなった昭和60年の日航機墜落事故の際、日赤の看護師は破損のひどいご遺体を段ボールやシーツなどの資材で人型に形成。その上に包帯を巻いて整え、遺族の元に返す活動に取り組みました。破損のひどいご遺体を整備する一方法としての「整体」は、赤十字看護師の思いを形にしたものでもあります。研修会では「整体」の実習にも取り組みました。

血液センターに女性画家5人が癒しの壁画



愛知県

愛知県赤十字血液センターの見学通路に「つながる・つなげる」をテーマにした全長27メートルの壁画が完成しました。



この壁画は、同センターが愛知県立芸術大学美術学部の倉地比沙支教授に制作を依頼し、同大学卒業生の女性画家5人による共作です。タイトルは「つながる風景」。壁画両側いっぱい、豊かな自然や楽しい情景が描かれています。制作リーダーの岩瀬晴香さんは「女性作家ならではの色合いや、やさしさで、癒しを与えることができれば幸いです」と出来栄を語っています。



壁画を見学ご希望の方は電話(0561-85-4283)で事前にご予約ください

いのちを守る知識身に付けよう！ 小学校で出前防災講座



大分県 / 広島県

日本赤十字社では青少年赤十字防災教育事業「まもるいのち ひろめるぼうさい」で防災教育プログラムを開発するなど、学校授業を通じた防災教育の普及に力を入れています。

大分県支部は11月1日に大分市立住吉小学校と中島小学校で防災教育の出前講座を実施。災害時にいのちを守る方法などを学んだほか、グループごとに非常時の持出品や身の回りの危険箇所について話し合いました。

広島県支部は11月25日、広島市長東西小学校の5年生児童と保護者を対象に模擬授業を実施。今災害が起きたら何を準備すればいいのかを、友達や家族と一緒に考えてもらいました。



写真を見て災害のイメージを膨らませます



避難所に持っていくものをみんなで討論

JRC中高生メンバーが減災・復興支援を現場学習



兵庫県

兵庫県中学校高等学校青少年赤十字協議会が11月8日に開催した平成27年度例会(2学期)で、県内加盟10校のメンバーと指導者の63人が一昨年8月に土砂災害に襲われた丹波市市島町を訪問。防災や災害時の避難のあり方、復興について学習しました。



大型ダンプ約10万台分の土砂が町内に流出した災害現場

市島町は、平成26年8月の集中豪雨による土砂崩れで、多くの家屋が土砂や浸水被害に遭いました。メンバーらは土砂崩れの現場を見学後、被災地の自治会長と市消防団から避難体験などを聞いて学習。減災や復興支援などについて討論するワークショップでは、「避難場所や危険箇所を知っておくためのスタンプラリーや情報交換会をしてみは?」「日ごろから山の様子をもっと知っておくべき」などの意見が出されました。



被害の大きさに言葉を失うメンバー

Voice & プレゼント

Voice

赤十字 NEWSにお寄せいただきました読者の皆さまの声をお届けします。

(11月号)特集面の義肢・装具をつけて仕事や趣味で生き生きと活躍されている方の顔がとてもとてもすてきでした。製作所の方のご努力はもちろん、出張経費をとらない姿勢に頭が下がりました。また、裁縫奉仕部もあることを知り、助け合いのすばらしさを感じました。

—山本淑子さん(三重県)

祖母に、父親と相次いで入院し、看護の質というもの初めて実感しました。入院時は、医師よりも身近な存在である看護師は患者本人だけでなく、家族にとっても大切な存在です。「お熱をはかりましょうか?〇〇さん」この一言に支えられ希望を感じます。暗くなりがちな病室では看護師さんの存在はまさに白衣の天使。質の高い看護のためにも学ぶ場が増えるのは良いことだと思います。

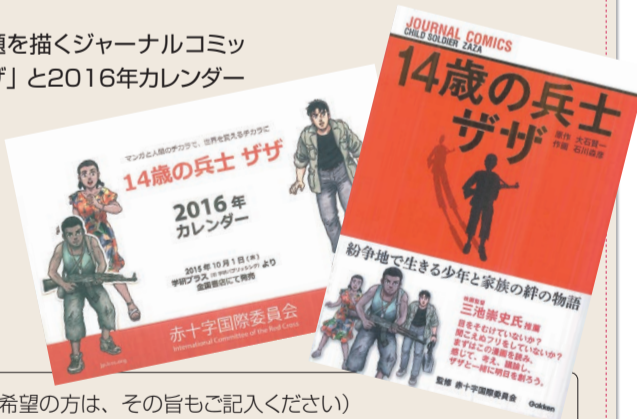
—小川藍さん(千葉県)

赤十字社は、医療活動だけだと50年間思い込みをしていた。しかし、赤十字語学奉仕団というボランティア活動があることを知り、私にも少しはお手伝いできることがあるのではないかと感じた。

—茂手木恵理子さん(神奈川県)

プレゼント

紛争地の人道問題を描くジャーナルコミック「14歳の兵士ザザ」と2016年カレンダーをセットにして3名様にプレゼントいたします。以下の項目を明記のうえ、郵送・FAX・メールでご応募ください。



- ①お名前(匿名をご希望の方は、その旨をご記入ください)
- ②郵便番号・ご住所 ③電話番号 ④年齢
- ⑤赤十字 NEWS 1月号を手にした場所(例/献血ルーム)
- ⑥1月号で良かった記事、興味深かった記事はどれですか?(いくつでも)
 - ◎ 社長新年のあいさつ ◎ 「はたちの献血」キャンペーン
 - ◎ 東京都赤十字血液センター移転オープン
 - ◎ 第10回赤十字・いのちと献血俳句コンテスト表彰式
 - ◎ 赤十字・赤新月国際会議 ① 未来のトモダチへ ② 健康豆知識
 - ③ 常任理事会開催報告 ④ 御下賜 ⑤ 特集 特殊奉仕団赤十字飛行隊
 - ⑥ エリアニュース ⑦ お知らせ ⑧ Voice&プレゼント
 - ⑨ 国際人道法模擬裁判 ⑩ フィリピン台風災害復興支援 ⑪ コラム
- ⑦ 赤十字NEWSのご感想、扱ってほしいテーマ、その他 Voice(読者の声)への投稿もお待ちしています。

応募先 ● 郵送/〒105-8521 東京都港区芝大門1-1-3 日本赤十字社 企画広報室 赤十字 NEWS1月号プレゼント係 FAX/03-3432-5507 メール/koho@jrc.or.jp(件名「赤十字 NEWS1月号プレゼント係」)

応募締切 ● 1月25日(月)必着 ※当選者の発表はプレゼントの発送をもって代えさせていただきます。

広域災害に備え各地で合同訓練



大分県 / 東北北陸 / 中・四国

大地震などの広域災害時には、救護活動も近隣支部や他機関との連携による対応が求められます。こうした事態に備えた合同訓練が11月7、8日に各地で行われました。

大分県支部は佐伯市で開催されたDMAT(災害派遣医療チーム)の九州沖縄ブロック実働訓練に参加。九州各県から参集した6チームのDMATと連携し、災害現場から救出された傷病者の受け入れや搬送などを訓練しました。今回の実働訓練には、唐津、鹿児島、熊本の各日赤病院のDMATが参加しました。

第3ブロック支部(愛知・富山・石川・福井・長野・岐阜・静岡・三重)は、福井県支部と福井赤十字病院を会場に合同災害救護訓練を実施しました。訓練では福井県支部に災害対策本部を設置。本部機能の運用や救護資機材の活用、医療救護、情報収集と伝達などの訓練に取り組みました。

高知県で開催された第5ブロック支部(広島・鳥取・島根・岡山・山口・徳島・香川・愛媛・高知)合同災害救護訓練は、中四国9県から救護班が集結し、dERU(国内型緊急対応ユニット)の展開と机上シミュレーションを実施したほか、被災地病院の初動対応やトリアージ、救護と後方搬送など実践的な訓練を行いました。



大規模災害では様々な医療機関のDMATとの連携と協働が不可欠です(大分)



原子力災害を想定した放射線測定訓練も行われました(福井)



災害救護の運用マニュアルを検証。中・四国9県の連携強化も図られました(高知)

ハートラちゃんのお菓子がネットで買えるんです おいしく食べて 日赤を応援してね!



日本赤十字社の公式マスコットキャラクター「ハートラちゃん」のイラスト(支援マーク)がついたお菓子がネットで購入できるようになりました。

日赤の活動に賛同し、資金協力などを寄せている法人・団体の広告や商品パッケージに表示されている「赤十字支援マーク」。ハートラちゃんのイラストは、この支援マークと併用できるもので、昨年9月から全国流通菓子卸協同組合のお菓子「ちょっとした気持ち」シリーズのパッケージに印刷されています。同商品の収益金の一部は日赤に寄付されることになっています。



9種類の味が楽しめる「ちょっとした気持ち」シリーズ。1品108円(税込)

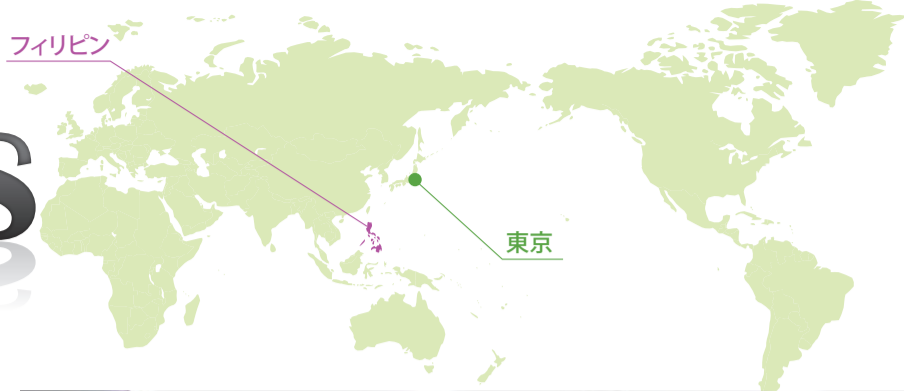
木村のあられ 慶屋 <http://www.yorokobiya.jp/>



お菓子のデパートよしや <http://www.okashi.jp/>



WORLD NEWS



国際人道法模擬裁判大会国内予選 同志社大チームが3度目の栄冠 戦争犯罪の審理通じ 人道法理解深める

紛争下に発生するさまざまな国際人道法違反、つまり戦争犯罪を題材に、検察側と弁護側に分かれて大学生が弁論する「国際人道法(IHL)模擬裁判大会国内予選」が12月5日、早稲田大学(東京・新宿区)で開かれました。参加大学は早稲田、横浜市立、同志社、立命館の4大学。熱い議論の結果、同志社大チームが2年ぶり3度目の優勝を果たし、今年3月に香港で行われるIHL模擬裁判アジア・太平洋地域大会への出場を決めました。

IHL模擬裁判の国内予選は赤十字国際委員会(ICRC)主催、日本赤十字社後援で、今回が6回目の開催。紛争地での事例を議論することで、赤十字運動や人道の理念、国際人道法を広く普及することが狙いです。裁判で取り上げられる事例は架空のものですが、毎年その時の国際情勢を反映したトピックが盛り込まれています。今回は、政府軍と反政府軍が対立する紛争の中で生じた性的暴力や一般市民を装ったテロ行為などの問題に焦点を置きました。チームごとに検察側、弁護側に分かれた学生は、国際人道法の知識を駆使してそれぞれの主張を展開。題材となった事例が戦争犯罪にあたるかどうかについて熱弁を振りました。

「人道理念を大切にした弁論を」

模擬裁判の裁判官役は米軍の法務部や外務省、日本弁護士連合会の代表者などが担当。各裁判官からは学生の弁論に対し、厳しい質問が繰り返される場面もありました。裁判官役の一人、日本赤十字社大阪府支部の森正尚課長は、自らが長年携わってきた国際救援活動の実務経験を踏まえ、「皆さんが議論している事例の奥には実際に傷を負い、苦しんでいる人たちがいます。そうした人たちのいのちと健康を守り、一人でも多くの人々の尊厳を守るためにはどうすればいいのか、単に法律のロジックを組み立てるのではなく、人道の理念を常に忘れないでほしい」とコメントしました。



優勝した同志社大学チームによる弁論の様子

昨年は京大チームが部門2位の快挙 アジア・太平洋地域大会

国際人道法模擬裁判大会は世界各地で広く行われています。アジア・太平洋地域の大会はICRCと香港紅十字会が中心となって毎年開催されていて、今年で14回目を迎えます。出場できるのは、各国国内予選の優勝チーム。昨年の大会には日本や中国などの東アジア諸国をはじめ、東南アジア諸国などから計24大学が参加しました。日本からは京都大学チームが参加。弁護側の書面部門第2位、ロールプレイ部門

で、日本・シンガポール合同チームとして第2位の快挙を遂げました。模擬裁判はすべて英語で行われ、学生には法律の知識に加えて、高い語学力、自らの主張を書面に反映させる文章力、裁判官役からの質疑に臨機応変に答えるコミュニケーション力など幅広い能力が求められます。そのため、学生たちは準備に何カ月もの時間を費やし、大会に臨みます。

フィリピン台風災害復興支援事業 学校再建によって故郷に戻った子どもたちにも喜び

2013年11月8日、フィリピン中部を襲った台風30号により、フィリピン・レイテ島東部では多くの学校で屋根が吹き飛ばされたり、浸水で校舎が使用できない状態になりました。台風から2年が経過し、避難先から故郷に戻る住民が増加。避難先の学校に通っていた子どもたちも、元の学校に戻ってくるため、学校再建が急務になっています。このため、日本赤十字社は災害

からの復興支援として、フィリピン赤十字社と協働で、学校施設の修復・再建を行っています。日赤の支援は地元の人びとの意見を取り入れ、学習環境の整備や使用可能な教室の増設だけでなくトイレ設備の新設など衛生面にも配慮。安全かつ衛生的で使いやすい校舎の実現にも寄与しています。子どもたちや学校関係者からは、「きれいな学校

を作ってくれてとてもうれしい」との声があがっています。日赤が取り組む学校への支援は、教室数を増やして収容能力を高めるなどのハード面とともに、施設の維持管理に対する生徒の意識向上も目指すなどソフト面にも配慮したものです。今後も学校関係者や地域社会との対話を重ねながら進めていきます。



再建後の新しい教室には、生徒手作りのクリスマスツリーが飾られています

70年 被爆 守るべきいのちと尊厳 —核兵器のない世界へ—

キッチンから世界法廷へ~1996年国際司法裁判所勧告的意見~

ニュージーランドの主婦ケイト・デュイスさんは日頃から自宅に友人を招いて、平和運動についての勉強会を開いていました。1986年、ケイトさんら市民グループはアメリカから国際法の専門家を招き、その中で「核兵器の問題を国際司法裁判所に提訴する」というアイデアに出会いました。このアイデアが、様々なNGOを巻き込んで「世界法廷プロジェクト」という運動となり、果ては国連総会を動かして国際司法裁判所(ICJ)への諮問へと結びつきました。足かけ10年で実を結んだその結果が、1996年の核兵器威嚇・使用の合法性に関する勧告的意見です。

ICJは国連機関のひとつで、国家間紛争を取り扱うだけでなく、国際社会の法律問題についても見解(勧告的意見)を下すことができます。それによると核兵器の威嚇・使用は、「国際人道法の基本原則に一般的に反する。しかし、国家の存亡がかかる極限状況では、確定的な結論を下すことはできない」という、明言を避けた形にとどまりました。この審理には世界中から大きな関心が寄せられ、35カ国が陳述書を寄せ、24カ国が口頭弁論を行い、25カ国から300万を超える署名が寄せられました。署名の大半は日本から寄せられたもので、ICJの倉庫に保管でき

ないほどの量だったとされています。証言台には広島、長崎市長も立ちました。ICJという国家間紛争を取り扱う場に、一市長が法廷に立つことは前例のないことでした。両市長の陳述は、「核兵器の威嚇・使用の合法性」という抽象問題に、広島・長崎の被爆者の凄惨な現実を吹き込み、「核兵器の使用が国際法に違反することは明らか」であることを訴えるものでした。赤十字国際委員会で法律顧問を務めた経歴を持つシエラレオネ出身のコロマ判事は、この勧告的意見への反対意見として、次のような見解(抜粋)を残しています。「広島市長の証言によると、原爆は無辜の一般市民を灰燼に帰してしまいました。お年寄り、若者、女性、男性、兵士、市民といったすべての人びとを無差別に殺傷したのです。…また長崎市長の証言によれば、運よく生き残った人でも多くの後遺症に苦しんでいると

ということです。…このため、核兵器のいかなる使用も国際人道法に違反していることは明らかです」 勧告的意見から20年が経ちますが、世界には未だ15000発以上の核兵器があり、その平均的な威力は広島・長崎型原爆の何十倍とも言われています。



国際司法裁判所(オランダ・ハーグ)